間一髪、屋根板を突き破って避難

浜松市南区金折町　磯部 茂栄

昭和20年当時、小生は16歳で旧制中学3年生だった。しかし戦争のため清水（現在の静岡市清水区）の工場で勤労奉仕をしており、帰省すると金折の神社には軍隊が駐留し、本土決戦に備えて各所に高射砲の陣地や防空壕が掘られていた。場所もあろうに私の自宅の真東の天竜川西派川の堤防の中にも、人間が立って入れるほどの高さで、長さ30mあまりの堅固な防空壕が構築されていた。まもなく終戦となり、兵隊達は解散していったが、防空壕は埋め戻されなかった。

終戦から2ヶ月ほど経過した10月5日、何日も続いた雨で天竜川は増水、堤防上でも手が届くほどの水位に達し、昼頃から村中は防空壕が危ないとのことで、半鐘は連打され、総動員となり、我が家では父親が水防に出かけていき、土盛り工事や立木を伐採して水流を変えるべく川の中へ放り込んだ。村人の必死の突貫工事にもかかわらず水位は増すばかりで、午後4時頃には遂に防空壕からチョロチョロと水が漏れ出てきた。と思う間もなく、空洞の堤防は強烈な水圧に耐えきれず一瞬にして大穴が開き、村人は放心状態で待避した。

同時に我が家には怒涛（どとう）のごとく濁流が流れ込み、畳は浮き、建具はへし折れ家財道具は流れ出し、家の中は泥沼の修羅場と化した。そのとき家にいた家族は女子供ばかり（当時兄は教職で龍禅寺小学校に勤めていた）、男は小生1人だけだった。10人余りいた家族全員をロープでつなぎあわせ、皆が泣き叫ぶ悲鳴の中、どうすることも出来ずまさにパニック状態となった。しかし、少しでも高いところへ上げようと、家族をアマ（天上裏）へ押し上げた。アマは真っ暗でギシギシと揺れ動き、今にも壊れて押し流されそうで生き地獄そのもの、全員死を覚悟した。でも、何とか脱出しようとアマからトタンで覆った藁葺（わらぶ）き屋根の裏側をもぎ取り、屋根へと人の抜けられる穴を開け、全員雨の降りしきる屋根の上に出した。屋根の上では目の前でバリバリと音を立て、ちぎれ落ちる屋根の庇（ひさし）や流木がぶつかり、土蔵や置物が次々と水没、流されるたびに悲鳴をあげて泣き叫んだ。そのとき小生は屋根の棟（むね）にまたがり、心に落ち着け、落ち着け、と念じながら西の方を見ると隣家の人たちも屋根や木にのぼり、助けを求めているのが見えた。ふとそのとき我が家の周りを見ると前は濁流、裏側は幾分穏やかで淀んでいた。水は既に屋根の庇まで来ていて、建っているのが不思議にさえ思えた。

小生は「ヨシ！今だ！」と心に決めて濁流に飛び込み100mほど北の御嶽神社の堤防まで泳ぎ着き、下飯田の杉本さん宅に救助を頼み込んだ。まだ日没少し前だったので、杉本さんらはかろうじて我が家まで船を出すことができた。家族全員が屋根から船に乗り移った直後、ほんとうに間一髪、待っていたかのごとく我が家は濁流にのまれ、家族全員九死に一生を得た。風雨はいっそう激しさを増し、刻一刻と夕闇迫る中、西の方の人たちの助けを求める声も嵐の中にもみ消され、ただ無事を祈るばかりでなすすべも無かった。その夜は家族全員が下飯田の姉の嫁ぎ先に身を寄せた。

一夜明けた朝、早々決壊箇所に行ってみると、ちょうど同窓の芳子さん（磯部嵩夫さんのお姉さん）がビショビショに濡れ、泥まみれで助けられたところだった。「家族は？」と小生が聞くと、「みんな死んじゃった」と大泣きで、何とも悲痛な思いだった。同窓のきよ子さんも犠牲者となった。破堤した堤防は70mあまりで、あたりは大海原、助けを求めた人たちもほとんど帰らぬ犠牲者となった。

水没した我が家だが、屋根は現在の浜松市立南陽中学校付近の芳川まで流れていったので、船で解体しに行った。このときの芳川村での被災概要は、流出家屋10軒、犠牲者20名、田畑の流出200町歩（約200万m²）だった。

天竜川（西派川）は破堤後の昭和26年、上流でせき止められ、今ではさりげなく流れる安間川となり、決壊箇所には「葦の会」で建立された石塔が当時を偲ばせているが、今では知る人も次第に少なくなってきている。しかし、私にとってはこの時の言語に絶する大惨事は生涯忘れることはできない。天竜川は私には今でも「暴れ天竜」である。天災というものの、これは防空壕のもたらした災害だけに、人災そのものであった。戦争直後のことでもあり、被災者には何の補償もなく、ただ毛布一枚だけで泣き寝入り、田畑の復旧は今日と異なり、トロッコやモッコ担ぎの人力ばかりの奉仕作業で、復旧作業により周辺住民は大変だった。

出典：芳川小学校昭和15年度卒業生
喜寿記念文集「思い出の記」

浸水図（浸水地域 濁流↓）

浸水地域と濁流の流れ

天竜川堤防決壊の河輪地区水害について

浜松市南区三新町　榎谷 卓二

10月に入ってから毎日雨が続き、とくに10月3日から5日にかけての降雨は激しく、5日の早朝より暴風雨となった。午前11時頃、東町新田の畑に水が流れ込んだとの情報で、役場吏員（職員）として見に行ったら、すでに一面の水浸しで、ごぼうの葉が少し見える程度であった。

午後2時頃、当時の警防団と、家にいるものは全員集合との発令があった。旧掛塚橋より北は、松の木、竹藪の覆い茂る堤防で、ここの旧い堤防に濁流が押し寄せてきていた。

濁流は堤防を乗り越えようとしているので、全員で土のうを積んで防戦につとめた。その時、上流より流れて来た木橋が掛塚橋に激突し、その拍子に掛塚橋もちぎれて流れて行き、筏（いかだ）や材木は数知れず流れて来た。

その後、すぐ「金折が切れた」と大声で叫んで来た人があった。天竜川の水はとたんに約1メートル下がっていった。「各自、家に帰って水揚げをせよ」との助役（松山隆治氏）の命令で解散したが、西北方のざわめきと、ざあざあという波のような音に、半鐘の乱打が響き、不気味な空気が漂っていた。河輪小学校西側の道路は40センチほどの水に浸かり、道路が隠れてしまっていた。三新は道路上で1メートルくらいの水位、西町と富屋は床上浸水で炊事に事欠くため、舟で食料の配布を行った。

舟は天竜川で使用していた木造船を5艘ほど役場へ集め、芳川農協倉庫より1艘について米俵10俵ずつ積み込んで、田畑の上を竿（さお）と櫓（ろ）で運んで来て、一般家庭に配給した。

電気は消え、水も飲めない、御飯も炊けない日が1週間ぐらい続いたが、電気がないので、配給された菜種油、灯油等を使って明かりとした。

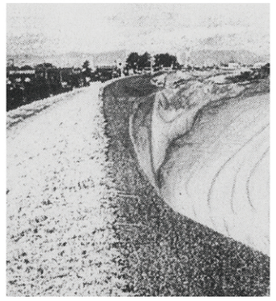
一方、10月7日から8日にかけて、天竜川の濁流の水かさは減ってきたが、その引き水の時に、弥助新田地内の堤防が6割方削り取られた。7日早朝より、川の中の瀬が引き水のため、一度に3メートルから5メートルもドサッ、ドサッと崩れ落ち、見ている間に本流が堤防際に迫ってきたので、三新の全員が集まり、堤防の決壊を防ぐため、付近の神社や旧堤防の松や杉の木を切って運び、振り投げ工法（松の木の根を針金で結わえ、枝先を水中に投げ入れ水勢を弱める方法）をしたが、一夜にして八番線で結んだ大木は土地諸共に流され、さらに水は堤防をドスンドスンと崩し、三新町東側の堤防は完全に半分になってしまった。堤防決壊の長さは約150メートル、幅は川岸から約20メートルくらい、水位が下がってようやく崩壊が止んだ。

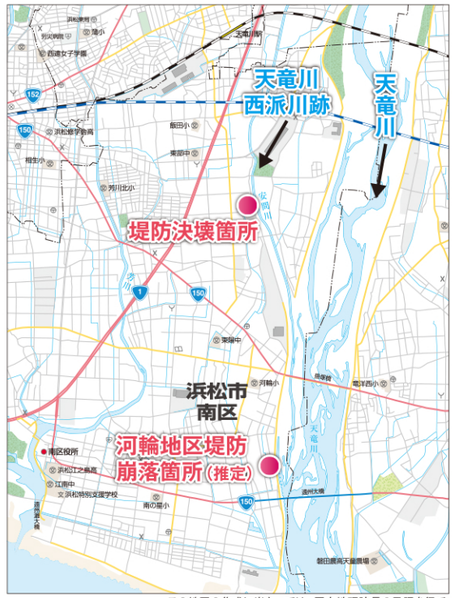
この一帯は、天竜川増水の都度肝を冷やし、早い復旧を望んだが、3、4年かかってようやく復旧された。

また、この年の米の供出は免除されると思っていたら、泥沼の覆った田から15俵を供出せよとの割り当てで、役場ではびっくり仰天し、大変困った。

出典：わが町文化誌「水と光と緑のデルタ」
浜松市立南陽公民館編

出水で半分に
なってしまった堤防





この地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を使用した。
（承認番号 平27情使、第49-GISMAP35617号）